

○大学で身につけてほしい力

課題（問題）が与えられる高校までとは異なり、大学では、自分で課題（問題）を見つける力、そしてその問題について分析する力、解決する力が必要となります。

○大学以降社会で必要になる力

目の前の現実にも目を向け、自分で課題を見つけ、考え、調べることを通して、課題を解決していく力。

インプット（読む・聞く）⇒調べる・考える⇒アウトプット（書く・話す＝表現）

※文学科では、文学作品等を通して、その力を養います。

○大谷大学文学部文学科での学び

文学の研究を通して、社会に貢献できる教養と見識を身につけ、社会と自律的にかかわることのできる人物を育成します。  
日本と中国を中心とする文学作品を扱い、読解と分析に必要な理論や技術を習得します。人間にとっての文学の意義と醍醐味を追究し、研究の成果を論文化・作品化する表現技能も養います。

memo

○文学とは？

文学＝感動の表現

- ※感動… ・強い感銘を受けて深く心を動かすこと。
- ・人の心を動かしてある感情を催させること。

○「本歌取り」とは？

- ・和歌・連歌などで、古歌の語句・趣向などを取り入れて作歌すること。新古今時代に盛んに行われた。（小学館『デジタル大辞泉』）
- ・和歌の技法の一つ。有名な古歌の心や趣向、また、情景や語句などを取り入れて、新しい和歌を作るもの。もとの和歌（＝本歌）の内容・詩情と重なり合わせることにより、複雑な内容を表現でき、余情・余韻を増す。特に、新古今集時代に盛んに行われた。（小学館『全文全訳古語辞典』）

○本歌取りの例

①『万葉集』巻第一・額田王

三輪山を 然（しか）も隠すか 雲だにも 心あらなも 隠さふべしや（18）

訳 三輪山を そんなに隠すことか せめて雲だけでも 思いやりがあってほしい 隠してよいものか

『古今和歌集』巻第二 春歌下・紀貫之

三輪山を しかも隠すか 春がすみ 人に知られぬ 花や咲くらむ（94）

訳 神聖な三輪山を春霞がすっかり隠している。その霞の陰には、誰にも知られない桜の花が咲いているのだろうか。

memo

②『万葉集』巻第三（雑歌）・長奥麻呂

苦しくも 降り来る雨か 三輪の崎 狭野の渡りに 家もあらなくに（265）

訳 せつなくも 降ってくる雨だ 三輪の崎の 佐野の渡し場に 家の者もないのに

『新古今和歌集』巻第六（冬歌）・藤原定家

駒とめて 袖うちはらふ 陰もなし 佐野のわたりの 雪の夕暮（671）

訳 馬をとめて雪の降りかかった袖をうちはらう物陰もない。佐野のあたりの雪の夕暮れよ

memo

## ○考察

- 『新古今和歌集』巻第三（夏歌）・皇太后宮大夫俊成

## たれかまた 花橋に 思ひ出でん われも昔の 人となりなば（238）

訳 たれが、また、花橋の香で思い出してくれるであろうか。わたしも死んで昔の人になってしまったら。

- 『新古今和歌集』巻第三（夏歌）・皇太后宮大夫俊成女

## 橋の にほふあたりの うたた寝は 夢も昔の 袖の香ぞする（245）

訳 橋の花の香のにおってくるあたりでのうたた寝は、見る夢の中も昔親しかった人の袖の香を思わせてにおっているのでしょうか。

- 『新古今和歌集』巻第三（夏歌）・藤原家隆朝臣

## 今年より 花咲き初むる 橋の いかで昔の 香ににほふらん（246）

訳 今年から花が咲きはじめる橋の花が、どうして昔の人の袖の香を思わせてにおっているのでしょうか。

- 『古今和歌集』巻第三（夏歌）・読人しらす

## 五月まつ 花橋の 香をかげば 昔の人の 袖の香ぞする（139）

訳 五月を待っている橋が早くも咲いてその香りが鼻をついてくる。それは昔親しかったあの人の袖のかおりを思い出させ、私を思い出の国にいざなってくれる。

- 『伊勢物語』（第六十段）

むかし、男ありけり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。この男、宇佐の使にていきけるに、ある国の祇承（しろう）の官人の妻にてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとせよ。さらずは飲まじ」といひければ、かはらけとりいだしたりけるに、さかななりける橋をとりに、

さつき待つ 花たちはなの 香をかげば むかしの人の 袖の香ぞする  
といひけるにぞ、思ひいでて、尼になりて山に入りてぞありける。

昔、男がいた。宮廷づとめがいそがしく、一心に愛情をそそいでやらなかったときの妻が、誠実に愛そうという人に従って、他国へ行ってしまった。この男が、宇佐の使いとなって行ったおりに、ある国の勅使接待の妻になっていると聞いて、「当家の主婦に盃を捧げさせよ。そうでなくては酒は飲むまい。」といったので、主婦が盃を捧げ持って差し出したところ、男は酒菜（さかな）として出された橋を手を持って、

五月を待って咲く橋の花の香りをかぐと、昔親しんだ人の袖の香が、なつかしくかおってきます。

と詠んだのを聞いて、その女は、この優雅な貴人は昔の夫だったと思い出し、わが身を恥じ、尼になって山に籠もって暮らしたのだった。

## ○参考

- 『源氏物語』（「花散里」）

（光源氏が麗景殿の女御を訪れ、昔語りをする場面）

かの本意の所は、思しやりつるもしるく、人目なく静かにて、おはする有様を見給ふにも、いとあはれなり。まづ、女御の御方にて、昔の物語など聞え給ふに、夜更けにけり。廿日の月、さし出づる程に、いとゞ木高き陰ども、木暗う見えわたりて、近き橋の薫り、懐しう匂（ひ）て、女御の御けはひ、ねびにたれど、あくまで用意あり、あてに、らうたげなり。「勝れて花やかなる御おぼえこそなかりしかど、むつまじう懐しきかたに、おぼしたりし物を」など、思ひ出で聞え給ふにつけても、むかしの事、かきつらね思されて、うち泣き給ふ。郭公、ありつる垣根（の）にや、おなじ声にうち鳴く。「したひ來にけるよ」とおぼさるゝ程も、艶なりかし。「いかに知りてか」など、忍びやかに、うち誦し給ふ。

「橋の 香をなつかしみ 郭公 花散る里を たづねてぞとふ

（昔の人を思い出させるといわれる橋のかおりをなつかしく思って、ほととぎすが橋の花散る里を探しもとめてやって来て鳴いています。）

いにしへ、忘れがたきなくさめには、まづ、参り侍りぬべかりけり。こよなうこそ、紛るゝ事も、敷そふ事も侍りけれ。おほかたの世に従ふ物なれば、昔がたりも、かきくづすべき人、少なうなり行くを、まして、つれづれと紛れなく思さるらむ」と聞え給ふ。

- 『万葉集』巻第十「花を詠む」（読み人知らず）

## 風に散る 花橋を 袖に受けて 君が御跡（みあと）と 偲びつるかも

訳 風に散る花橋を袖に受けてあなたの記念としてお慕いしました。

- 『万葉集』巻第十「譬喩歌」（読み人知らず）

## 橋の 花散る里に 通ひなば 山ほととぎす とよもさむかも（1978）

訳 橋の花の散る里に通ったら山ほととぎすが大声で言いふらすだろうか。

memo



雨曜日

藤富保男

雨あがりの道をかえる  
蛙いっぴき とびはねて  
寝ている仲間にとびかかり  
刈り込みのなかで 喧嘩する  
すると間もなく一滴の  
木の上から雨粒ふり  
振りむくと林は雨  
雨の音 木々にしみ入り  
入り組む枝のすき間から  
カラッと晴れた西の空  
そら来たとはばかり とび出した  
下をむけば あらっ さっきの蛙  
帰る道を 蛙と共に

竹中郁

こんな冷たい接吻べせがあるものか  
それにうっかりしていると  
対手あいては夢のようにとけてしまう  
はかない恋の一時だ！

竹中郁

色鉛筆の見本帖

竹中郁

だまって この羽毛に埋れていよう  
きれいな白鳥の羽交締だ！

その二、出発点は同じだけれど……

かなしみ

谷川俊太郎

あの青い空の波の音が聞えるあたりに  
何かとんでもないおとし物を  
僕はしてきてしまったらしい

透明な過去の駅で  
遺失物係の前に立ったら  
僕は余計に悲しくなってしまった

六十二のソネット 41

谷川俊太郎

空の青さをみつめていると  
私に帰るところがあるような気がする  
だが雲を通ってきた明るさは  
もはや空へは帰ってゆかない

陽は絶えず豪華に捨てている  
夜になっても私達は捨てるのに忙しい  
人はすべていやしい生まれなので  
樹のように豊かに休むことがない

窓があふれたものを切りとっている  
私は宇宙以外の部屋を欲しない  
そのため私は人と不和になる

在ることは空間や時間を傷つけることだ  
そして傷みがむしろ私を責める  
私が去ると私の健康が戻ってくるだろう

空を見ていると

高見順

空を見ていると  
黒く小さな蝶のようなものが  
数多のそのようなものが  
僕の胸から飛び立った  
僕は何か失ったのである  
だのに何かを加えられたような気がした

夏の日の歌

中原中也

青い空は動かない、  
雲片ぎれ一つあるでない。  
夏の真昼の静かには  
タールの光も清くなる。

夏の空には何かがある、  
いじらしく思わせる何かがある、  
焦げて図太い向日葵が  
田舎の駅には咲いている。

上手に子供を育てゆく、  
母親に似て汽車の汽笛は鳴る。  
山の近くを走る時。

山の近くを走りながら、  
母親に似て汽車の汽笛は鳴る。  
夏の真昼の暑い時。

秋の空廓寥として影もなし  
あまりにさびし  
烏など飛べ

石川啄木